

# 蔡元培の大学論

—北京大学の改革を中心に—

後藤延子

## 一 はじめに

中国近代教育の「開山祖師」<sup>(1)</sup>と称される蔡元培の教育家としての生涯は、1898年、彼が好意を寄せつつも一抹の危惧を抱いて見守っていた、戊戌変法の挫折から開始した。彼はその原因を、「先ず革新の人材を培養せずして、少数人を以て政權を弋取し、頑旧を排斥せんと欲する」ことに求めた<sup>(2)</sup>。これが、1889年挙人(23才)、90年会試合格、92年進士、翰林院庶吉士、94年翰林院編修という、順調なエリート官僚コースを惜し気もなく放擲させた動機をなしている。従って彼の教育に託した目的が、中国の革新を担い得る人材の育成にあったことは明白であった。

だからしてそれは、同じく戊戌変法の教訓に学ぶとはいえ、1902年欽定学堂章程、03年奏定学堂章程、学務綱要、06年教育宗旨を頒布して、立憲君主制による清朝政府の再編強化を意図した、近代的教育体系の整備とは、その方向を全く異にしていたと言わざるをえない。ところでそれは、嚴復の教育活動とはいかなる関係にあるか。蔡元培の教育活動の最大の特徴は、一体どこに見出されるのであろうか。彼の教育家としての生涯を、辛亥革命をさかいに大きく二分しつつ、それを簡単に見ておくことにしよう。

辛亥革命前の前半期において、彼は紹興中西学堂監督、南洋公学特班総教習を経て、1902年中国教育会を上海で組織し、その事業の一環として、愛国学社、愛国女学校の設立と運営に携わっている。そこでの教育活動について、彼は次のように回想している。

私が南洋公学にいた時、批評し添削した日記および月課は、もともとすでに民権女権の提唱に傾いていた。学社に来るに及んで、激烈な環境の影響を受け、遂にまた革命を公言してはばからなかった。36才以後、私はすでに革命工作への参加を決意しており、革命には二つの方法があるだけだと考えていた。それは、一つは暴動であり、一つは暗殺である。愛国学社で軍事訓練の助成に尽力したのは、暴動の種子をまいたことになる。また暗殺は女子により一層ふさわしいので、愛国女学で暗殺の種子をまく準備をした<sup>(3)</sup>。

それは一言で言えば、革命のための教育であった。換言すればそれは、ロシアの東三省占領に対する拒俄義勇隊の結成、『俄事警聞』の発刊(日露戦争勃発により『警鐘日報』と改名)、対俄同志会の発起など侵略への抵抗活動、及び1904年光復会会長、05年中国同盟会加入、暗殺団を組織して爆弾を製造するなどの革命活動と、不可分の連関の下に、その重要な一環として位置づけられていたのである。彼にとり、教育は革命鼓吹の最も根本的な手段に他ならなかった<sup>(4)</sup>。そして、「辛亥革命の時、本校の学生で南京の役に従事する者が多かったのは、教育の効果でないと言うことはできない」<sup>(5)</sup>との発言は、その成果を確認したものと見てよからう。以上よりして、前半期の教育活動は、教育を政治に解消する、政治主義的色彩が濃

厚であったと結論しても差支えあるまい。

1907年から11年までのドイツ留学（ライプチヒ大学）の後、蔡元培の後半期の教育活動は、民国元年の教育総長、民国6年から15年までの北京大学校長（実質的には12年初めまで）、民国16年から17年までの国民政府の大学院長、及び17年からの中央研究院長としての職務がその主要な内容であり、教育行政が中心を占めていた。そしてその課題は、清朝の遺風を一掃して民国の基礎を固め発展させることにあり、中国同盟会員として、また中国国民党員としての彼の政治活動そのものに他ならなかった<sup>6)</sup>。

革命の前と後とでは教育に寄せた課題が異なり、またヨーロッパの教育事情を親しく見聞したことも作用してか、後半期の場合、前半期の如き政治主義的傾向は全く影を潜めている。だが、教育がその政治活動の重要な一環として位置づけられていたことに変わりがあるわけではない。彼はあくまで政治家として教育家であったのであり、教育は、「性、学術に近くして政治に宜しからず」<sup>7)</sup>との、彼の性向に即して選り取られた活動分野に他ならなかった。「政治を超越した教育」としての世界観教育・美感教育の提唱も、「政治に隷属した教育」を決して排除するものではなかった<sup>8)</sup>。以上から見られるように、彼の場合、教育と政治は決して別個のものとして切離せるものではなかった。勿論、ここで言う政治はいわゆる狭義のそれではない。

そしてこの点に、蔡元培の教育活動の最大の特色があり、嚴復のそれとの決定的な相異があった。嚴復の場合、中国人一人一人が未開状態を脱することなしには、中国の真の革新は望むべくもなかった。彼が西洋近代の政治・社会理論の翻訳・紹介と同時に、1900年に名学会を組織し、西洋の論理学の移植により中国人の思惟方法の変革に精力を傾注したのは、専らそのために他ならない。要するに彼は、近代社会を現実化するための政治的変革に先だって、中国人の近代人への転生を必須条件としたのである。1905年にロンドンで孫文から批判されたように、まさしくそれは、百年河清をまつに等しい非現実的方法であった<sup>9)</sup>。我々はここに彼の啓蒙思想家としての本質を鮮やかに見てとることができよう。このように政治を教育に解消し、全てを教育に還元したがゆえに、嚴復は辛亥革命を時期尚早と断じ、民国以後はひたすら前進への危惧を表明し続け、時の流れに取残される結末を迎ったのである。

さて本稿では、以上の如く政治家でありつつ教育家である蔡元培の、後半期の活動の中軸をなす高等教育改革プラン、すなわちその大学論を、彼が実地に携わった北京大学（以下、北大と略す）の改革を中心に見てゆきたいと思う。

1912年、教育総長蔡元培は次長范源廉の普通教育重視の意見に対し、「よい大学がなければ、中学の先生はどこから来るか。よい中学がなければ、小学の先生はどこから来るか。だから我々の第一歩は、まず大学を整頓すべきだ」と反論した<sup>10)</sup>。教育における教師の役割を決定的に重視する彼にとり、全教育体系の成否は一に大学の整備にかかっていた<sup>11)</sup>。従ってその大学論は、大学論に尽きるものではなく、彼の全教育論を集中的に反映したものと見て差支えなからう。

そして、北大は周知の如く、中国最初の国立大学として、他の大学のモデルとも言うべき位置を占めていた。と同時に、蔡元培自身も、高等教育の全般的状況を十分ふまえて、その改革に取り組んでいる<sup>12)</sup>。更に後の大学院長としての改革プランも、北大改革の理念の継承に他ならないと言えるからして、北大改革を中心にするに於てその大学論に接近することは、最も妥当な道筋としてよいだろう。

さて、以上の如く北大改革を中心に蔡元培の大学論を把えようとする本稿には、およそ二つの目的がある。一つは、彼により礎石をすえられた大学の性格と機能との解明を通じて、中国における学問研究のあり方、知識人のあり方の特質に迫る一つの手がかりを得ることである。次に、解放後の思想改造運動の中で、蔡元培の大学論の自由主義的性格が批判の対象にのぼされた。本稿は、その自由主義の実質を闡明するとともに、蔡元培の大学論の真実の姿を浮彫りにすることにより、今なお混迷の淵にある中国の大学の行く手に、一つの参考資料を提供したいと思う。勿論それは、我々の当面する日本の大学改革においても、無意味なことではないだろう。これが第二の目的である。

さて、我々はまず次章で、蔡元培の民国元年の教育改革を概観してみることにしよう。なぜなら、北大改革の全ゆる萌芽はここに胚胎すると見てよいからである。

## 二 民国元年(1912)の教育改革

蔡元培の教育総長在任期間は、1月、孫文大總統下での就任から、4月、袁世凱大總統、唐紹儀國務総理の下で留任、7月辞職するまでの短期間にすぎなかった。しかもその間、袁世凱の南下就職欲迎特使として北上しているからして、実質的には更に短かい。

彼は就任するや否や、紹興中西学堂時代の教え子で、後に北大校長代理を勤めた蔣夢麟らの助言の下に、権力交代による空白から生ずる教育の混乱と不統一を避けるため、『普通教育暫行弁法』、及びその課程標準を頒布した。その主な内容は、初級小学校における男女共学の実施、小学校の読経科の廃止、清朝の学部が頒行した教科書の一律使用禁止、共和国の宗旨に合致した教科書の使用、中学校は文・実の両科を分けず普通教育とする、出身の奨励を廃止して卒業生と称する、などであった。

以上の暫定措置の後、2月に『教育方針に対する意見』を発表した。彼はその中で、清朝の教育宗旨のうち、共和政体に合わない忠君と、信教の自由に反する尊孔とを取消し、尚武・尚実・尚公の代りに、軍国主義・実利主義・公民道徳を提唱するとともに、「政治を超越した」教育理念として、世界観教育・美感教育の二つをつけ加えた。

彼はこの自らの教育宗旨案を、全国の教育家を召集して民国教育の基本事項を審議した、7月の第一回全国臨時教育会議の冒頭で説明した<sup>49</sup>。彼は民国の教育と君主時代のそれとの相違は、被教育者を主体にして着想するか否かにあるとし、「君主時代の教育は利己主義に他ならない。君主あるいは少数人結合の政府は、その利己主義を目的物として、国民の利己心を揣摩し、一種の方法でそれに投合して、君主政府の主義におとなしく従わせるのである」と言い、その本質を暴いた。彼によれば、民国の教育の目的は、国民の立場に立ち、社会や世界のために責任を尽すことのできる能力の養成にあった。そして彼の提案した五つの教育宗旨こそ、そのために不可欠のものであった。

その上で彼は、旧来の「自大」と「自棄」の陋習を取上げ、前者が容易に後者に転化する構造をもつことを指摘した。そして、普通教育での読経の廃止と並んで、大学で経科を廃し、文科の哲学門・文学門・史学門にそれぞれの古典を繰入れたことを、「自大の旧習を破除する一端」だと位置づけた。それと同時に彼は、日本の学制一辺倒が従来はそれなりに理由があったにせよ、「しかし日本の国体は中国と同じではないから、欧米の適当な方法をも合わせて採用しなければならない。たとえ日本や欧米各国でまだ実行されたことがなく、教育家

が鼓吹している最中のものでも、我々はまた採用できる。我々は原理上から観察して、採用できるものは採用すべきであり、その場合、自分に先んじて実行した者があることを必須条件としない」とし、自らの主体性において独自に教育制度を模索する方向を明確に打出した。彼にとり、これこそ「自棄」の陋習を克服する、具体的な方法に他ならなかった。

さて、以上の基本方針の下に、40余りの議案を用意して進められていたこの会議の半ば、蔡元培は辞職した。袁世凱の國務院無視に抗議し、同盟会員籍をもつ国務員が連袂辞職することになったからである。心残りではあっても、職に恋々として原則を曲げることは、一国の教育を統べる人間として、「精神教育において頗る妨げがある」<sup>40</sup>だけでなく、清朝時代、「曖昧な愛國談」に足をすくわれることなく、毅然としてその特性を守ってきた、同盟会の主旨を汚すことでもあった<sup>41</sup>。しかし、原案通りの通過は困難であったにせよ<sup>42</sup>、ともかく彼の方針を基本的に受入れて、民国教育は出発することになった。その意味で、彼を名実ともに民国教育の生みの親と称することは可能である。

ところで民国元年の大学令に殆どそのまま盛りこまれることになった、蔡元培の高等教育改革構想をここでまとめておくことにしよう。まず日本の学制に倣い各地に設けてあった高等学堂を廃止し、大学入学者の程度をそろえるため、大学内に預科を設置することにした。また北京の外、南京・漢口・成都・広州に国立大学を創設し、各地方の學術文化の中心にしようとした。更に大学は文理の二科を偏重すべきだとし、法商等の科のある大学には文科を並設し、医農工等の科のある大学には理科を並設しようとした。その他、通儒院を大学院に改め、教授と学生の研究の場として、大学院の各研究所で自主的にテーマを決めて研究し、それが完成して初めて卒業できるようにしようとした。

さて以上の如きを主な内容とする蔡元培の民国元年の大学改革案は、経科の廃止と大学内の預科の設置（但しこれも、預科が半ば独立し、しかもその編制・年限に問題が生じたため、民国6年に大学の各科に直接隷属させ、年限を2年にするなどの手直しを迫られた）を除いて、ことごとく机上のプランに終始した。ここに萌芽的に示されている彼の大学に関する理想が、より明瞭な形を取り、実際に改革に着手されるのが、民国6年以降の北大校長時代であったと見てよかろう。逆説的に言うならば、今回の試みが空しく挫折したからこそ、蔡元培の北大校長就任は実現したとも言えるだろう。

ところで以上の外に、民国元年の教育総長としての改革で特筆に値するのは、従来の普通教育司・専門教育司の他に、成人教育、補習教育推進のため、社会教育司を特に増設したことである。そしてその仕事には、夏曾佑、周樹人（魯迅）などの人材が充てられている。

### 三 北京大学の改革 一大学の理念一

1916年6月、袁世凱は帝制復活の夢破れて死んだ。そして黎元洪新総統の下、民国元年4月から蔡元培の下で教育部次長を勤め、その辞職後教育総長を引継いだ范源廉が、教育総長に返り咲いた。こうした中国内部の新しい動きが、再びドイツに留学していたが、大戦の戦火を避けフランス西南部のツールーズに移り、李石曾や吳稚暉らとともに勤工儉学会、華工学校などの活動に携わっていた蔡元培に、北大校長就任を電報で要請させることになった。

早速帰国の途につき、上海に到着した蔡元培の前には、今回の就任について、賛否両様の意見があったという。一つは、北大の腐敗は甚しく、もし整頓に成功しなければ、名声に傷

がつくことを心配するものであり、他の一つは、腐敗は周知のことであるから、失敗しても誠意を尽した点は評価されるとするものであった。蔡元培は、孫文もその中に含まれるという、後者の少数の意見に従い、就任を決意したと述べている<sup>97</sup>。

しかし、彼の危惧と躊躇とを振切らせた最大の理由は、「我々がもし切実に教育から着手すれば、わが国をして危きを安きに転化できないことは決してない。国外で営む教育は、国内でのその切実さには及ばないようだ<sup>98</sup>」との発言に端的に示される、救国の使命感以外の何物でもなかった。彼にとり、フランスでの教育活動はそれなりに意義があるにせよ、やはり隔靴搔痒の感が残るのをいかんともできなかった。だからして彼は、幾多の困難が待たせていようと、与えられたチャンスに再度挑戦しようとしたのである。

かくして民国6年(1917)1月、北大校長に就任した蔡元培は、まず大学の理念を学生に明確に認識させることから始めなければならなかった。1月9日、彼は就任演説の中で、「宗旨をきちんと把握すること」「徳行を砥礪すること」「師友を敬愛すること」の三つを、学生に要求した<sup>99</sup>。第一の「抱定宗旨」の中で、彼は、「大学は高深の学問を研究するものである」との「宗旨」を明確にし、北大の全国に名高い腐敗の根源が、学生の「做官発財(役人になって金儲けをする)思想」にあることを指摘した。当時の北大は、その前身京師大学堂(1898年創立)の学生が全て京官であったところから由来する、立身出世主義的な科挙の遺風を根強く残存させ、学生は法科が圧倒的に多く、文科は少なく、理科は更に少ないありさまであった。大学は卒業証書を手に入れ、官界に入る資格を得るための階梯にすぎなかった。従って、学生は屢々休講しても政府に地位のある人を歓迎し、学術を専門に研究し、真面目に授業をして厳しく試験をする教員は忌避され、些細なことを口実にボイコットまでされることもあった。そこには、「平時は放蕩治遊し、試験には講義録を熟読する。学問の有無を問わず、ただ点数の多寡を争うのみである。試験が終わってしまえば、書籍は高閣に束ね、少しも顧みようとしない」という、怠惰な空気が弥漫していた。

そして、北大がこうした荒廃の淵に沈んでいたればこそ、蔡元培は、「大学は純粋に学問を研究する機関であり、資格養成の場所とみることはできないし、また知識を販売する場所ともみることはできない<sup>100</sup>」ことを、再三再四強調しなければならなかったのである。

それゆえ、学問の研究よりも「做官発財」に関心のある人間は、大学にではなく、高等専門学校に行くべきであった。蔡元培は高等教育を、「学」を治める大学、すなわち研究機関と、「術」を治める高等専門学校、すなわち職業教育機関とに、明確に区分する考えをもっていた<sup>101</sup>。従って彼は、「専ら学理に属する」基礎科学にのみ大学を限定し、「致用を偏重する」応用科学は排除すべきだとする<sup>102</sup>。言い換えると、真理を探究する文理のみを大学とし、法商農工医は高等専門学校に委ねようと言うのである。勿論この区分は、「これを習う者の旨趣が同じでない」との各々の性質の差異に基づくものであり、両者の間に、「年限と程度との差が必ずしもあるわけではな」かった<sup>103</sup>。

とはいえ蔡元培は、既に一方に法科大学があり、他方に法政専門学校があり、社会には「顕やかに階級の見が存し<sup>104</sup>」ている現実も無視できなかった。従って彼は、現存の高等専門学校を全て大学に昇格させることにより、両者の卒業生が、「社会に服務するに、つねに互いに齟齬の点がある」といった、既に日本で顕在化していた不都合な現象の予防を図った<sup>105</sup>。「大学は専ら文理二科を設く。その法医農工商の五科は別に独立の大学とする」、これが基本理念を生かしつつ、現実との調和をめざす、蔡元培の改革案であった<sup>106</sup>。そしてこの

原案は、教育部召集の在京各高級学校代表会議により、各科の基礎科学を編入した上で、文理を大学本科とし、その他の各科を分科大学とすると修正されて、一応の決着を見た<sup>87)</sup>。

ところで、その文理自身についても、蔡元培は、両者は「分科できない」との「理想」を抱いていた。なぜなら、「文科の哲学は必ず自然科学に基礎を置き、理科の学者の最後の仮定も往々哲学に関連する」からであり、また心理学、教育学、美学、地理学、歴史学などは、文理のいずれに属するか判然と決め難いからであった<sup>88)</sup>。このことは文理の研究対象が真理であるという、独自の性格に由来するものとしてよかろう。従って、真理の一体性の分断に反対し、文理の有機的連関性を重視する彼は、文理を分科させず、14の系を立て、その総合的学習を保証することにした。

ところで、学問研究機関としての大学は、より厳密に定義するならば、「共同して学術を研究する機関」<sup>89)</sup>、つまり学問研究共同体であった。

それゆえ、学生も、「教員の指導の下に自主的に研究するもの」<sup>90)</sup>として、当然、その重要な構成メンバーに他ならなかった。蔡元培が従来の学年制を選科制(単位制)に切替えたのも、そうした学生の位置づけに基づくものであった。と同時に彼は、学問研究共同体の中に、性による差別があることを認めるわけにはいかなかった。彼は、「教育部の大学法令には、専ら男子学生のみを入学させるとの規定はない」ことを楯に取り、「現在女子学生が入学を要求し、程度がまた十分なので、拒絶する理由がない」として、1920年、女子学生の入学を許可した<sup>91)</sup>。そしてこれが、中国の各大学における男女共学のさきがけとなった。

さて、学問研究共同体の重要な構成メンバーとして学生を位置づけた蔡元培は、今迄あまりの怠惰に慣れた、学生の自覚を促すことに努力を傾けた。彼が就任演説で、「徳行を砥礪すること」「師友を敬愛すること」を求めたのは、何も道学者的説教をしたわけではない。学問研究のためには、「心を乱す嗜好を屏除しなければならない」<sup>92)</sup>との見地から、学生の乱行を厳しく戒めたのであり、学問研究共同体のメンバーとして互いに切磋しあう師友であるがゆえに、それを大切にしよう訴えたのである。1918年、彼が北大進徳会を發起し、女遊び・賭事・蓄妾の悪習を駆逐し、獵官運動を禁止したのは、ひとえに学生の規律ある生活の確立のためであった。

だが彼は、やみくもに禁欲を説き、勉強一筋を強制したわけではない。彼は、「諸君が終日机の前に首をたれ、孜々として勉強して少しも娯楽の事がなければ、必ず身体上の苦痛を感じるだろう。諸君のために計るに、正当な娯楽を以て不正当な娯楽にかえ、道徳において欠けることなく、身体において有益なことをこいねがうにしくはない」として、健全な娯楽は積極的に奨励した<sup>93)</sup>。とりわけ彼は学生の体力の増強に注意していた。そしてこれと同時に、彼は、「学理の研究には一種活潑な精神が必要であり、古人の『三年、園を窺わず』の融通のきかぬやり方では、成しとげることができないものではない」として、自主的創造的精神の涵養を強調した<sup>94)</sup>。体育会・音楽会・画法研究会・書法研究会・新聞学研究会・学生儲蓄銀行等々、北大におけるおびたしいサークルや団体などは、殆ど以上の蔡元培の方針の下に、積極的に育成されたものである。

ところで、同じく学問研究共同体の不可欠の構成員である教員については、蔡元培は、「ただ学問ある人を求めるだけでなく、さらに学問上において非常に研究の興味があり、並びに学生の研究の興味を引起すことができることが要求される」として、その条件を明確にした<sup>95)</sup>。

そして、以上の如き自主的な学問研究共同体としての大学を制度的に保証するため、蔡元培は各種の研究施設の設置を計画した。彼にとり、研究所は、「教員は講義録の写しを交付して進歩を求めない陋習に陥り易い」、「大学卒業生は外国留学以外に、更に深く研究をきわめる機会がない」、「在学中の高学年生が自由に研究する機会がない」との弊害を救い、三者各々の研究の進行を助ける、最も有効な措置であった<sup>99</sup>。『北京大学廿週年紀念特刊』（1918年）によると、研究所が設けられ、研究主任の下に毎学期初めにテーマを定め、毎週研究会を開き共同で討論すると記されている<sup>100</sup>。

ところで、以上のような新しい大学の理念がモデルとしたものについて、蔡元培は『北京大学二十週年紀念会演説詞』の中で、民国元年の経科の廃止は、フランクフルト大学が神学科を設けなかったのに類似し、北大校長としての文理の重視は、ドイツの大学の哲学部の発達になぞらえられるとし、北大について、「望むところは、内容が次第に充実し、かの国のベルリン大学と相頤頤できるのみ」と述べている。また、毛沢東らにより創設された湖南自修大学について、1922年、『紹介と説明』の一文を草し<sup>101</sup>、その中で、「大学は本来専門研究を本位とし、あらゆるクラス分けしての講義は研究を指導する作用にすぎない」と言う。そして、日本やアメリカが講義形式を主体としているのに対し、イギリスは専ら学生の自主的研究に任せ、ドイツ、フランスは講義も重視するが、各科の学問には必ず研究所が設けられ、教員と学生の共同研究が保証されていると言う。

従って、以上を考え合わせると、我々は、蔡元培の大学改革プランの根柢をなすのは、シュライエルマッヘルの構想に成る、ベルリン大学だと結論しても差支えなからう。彼はこれにより、日本の学制の模倣を脱却して、新しい大学の理念の定着をめざしたのである。そして、湖南自修大学が、その名の示す如く、自主的研究を重視し、図書館・実験室の充実を強調している点に、自己の理想との一致点を見出したのであった。

さてそれでは、以上の如きドイツの大学に範を取った蔡元培の新しい大学の理念が、いかに現実の大学運営の中に具体化されていったかについて、次に見てゆくことにしたい。

#### 四 北京大学の改革 一大学の運営一

さて、蔡元培の自由な学問研究共同体という大学の性格規定よりして、最初からある一つの学説を真理として前提することが許されないのは至極当然のことだろう。彼にとり、「大学は、大典を囊括し、衆家を網羅する学府」でなければならなかった<sup>102</sup>。彼は、「各国の大学は、哲学の唯心論と唯物論、文学美術の理想派と写実派、経済学の干涉論と放任論、倫理学の動機論と功利論、宇宙論の楽天観と厭世観とが、常に雑然とその中に並んでいる。この思想の自由の通則が、大学の大である所以である」と述べている<sup>103</sup>。

それゆえ、思想の自由、各種の学問の「兼容並収」<sup>104</sup>が大学の特質である以上、当然、教員人事も一定の学問的立場の人ばかりに偏るわけにはいかない。彼はそれについて、「私はもともと学術上の派別は相対的で、絶対的なものではないと信じていた。だからどの学科の教員も、たとえ主張が同じではなくても、もし『これを言いて理を成し、これを持して故あり』であれば、それらを並存させて、学生に自由選択の余地をあらしめるのだ」と言っている<sup>105</sup>。

蔡元培はこうした自由主義的大学の運営方針に基づいて、一方では、劉師培、黄侃、辜鴻銘、

馬叙倫らを受入れるとともに、他方では、陳独秀、胡適、周作人、高一涵、吳虞、李大釗など、五四新文化運動の論客たちを、次々に北大に呼び集めた。かくして、北洋軍閥政府のお膝元にある北大は、蔡元培校長の下に、『新青年』派の拠点として、その面目を一新させたのである。

従って蔡元培の自由主義は、当時においては、決して妥協の表現ではなく、むしろ激しい戦闘性の表明に他ならなかった。だからこそ、北洋軍閥政府は彼を憎み、北大の過激化に危機感を煽り立てられたのである。そして、1919年3月の桐城派の文人林紓（字は琴南）の公言報に載せた蔡元培宛公開書簡こそ、彼ら封建軍閥勢力の真正面からの攻撃に他ならなかった。それは一枚の紙片であるとはいえ、実は一触即発の砲火にも匹敵するものであった。

だからして、蔡元培としても、それに必死に立ち向わねばならなかった。彼は北大に関する林紓の、「必ず孔孟を覆し、倫常を滅ぼすを快しとする」、及び、「ことごとく古書を廃し、土語を用いて文章を作る」との非難に対し、具体的証拠をあげるよう要求し、それが言いがかりにすぎぬことを明確にした。と同時に彼は、その自由主義的な大学運営方針を公表し、学説については、思想の自由の原則に従い、教員については、その基準を「学詣」におくことを宣言した。従って、校内での講義は、思想の自由に背かないかぎり自由であるとともに、「その校外での言動はことごとく自由にまかせ、本校は今まで口を出したこともなければ、また代って責任を負うこともできない」とし、大学が教員に関して負うべき責任の範囲を明確にした。それゆえにそれは、北大の教員のうち、民国の排斥する復辟論者（辜鴻銘）、世の正論の指弾する籌安会の発起人（劉師培）の場合に通用した如く、「革新の一派」においても通用させる必要があった。そして、たとえ私生活上で女遊び・賭事・蓄妾のことがあっても<sup>44</sup>、「苟くも授業が荒れず、決して学生を誘ってともに墮落するようなことがなければ、しばらくこれを許す」ことを明らかにした。

ここに我々は、蔡元培の苦心の反撃と、その自由主義の徹底とを見出すに難くなかろう。ところで彼の自由主義を、『新青年』派に北大の門戸を開放するための単なる戦術と見ることは、あまりに皮相にすぎるだろう。勿論、彼は章士釗のような、新旧の調停者ではない<sup>45</sup>。彼はあくまで新文化運動の擁護者であり、彼の場合、自由主義はそれと相容れぬことがないばかりか、むしろそれを支えていたとも言ってもよい。

さて彼の自由主義は、存存するものの合理性を認め、それが他のものとの競争の中で、「自然淘汰の運命」に達するまでは、その存在を容認するとの、進化論的世界観に基づくものであった<sup>46</sup>。それゆえそこには、新しいものの優越性に対する強い信念が横たわっていた。と同時に、旧勢力が新しいものを暴力で抑えつけることに対する、激しい抵抗のエネルギーも潜んでいた<sup>47</sup>。従ってそれは、北大の図書館主任で、中国共産党の創立者の一人となった李大釗の、新旧の自由な競争を通じて真理が自らその権威を開示するとの確信<sup>48</sup>にも、通ずるものをもっていた。だが、蔡尚思も指摘するように<sup>49</sup>、現実の動きにつれて思想が変化するということが少ない蔡元培の場合、進化論に由来する漸進主義・非暴力主義への固執が、1927年の国共分裂の真相を見誤らせる一因をなしたとも言うことができるだろう。

ところで、蔡元培の北大に、北洋軍閥政府のむき出しの弾圧が行なわれたのは、1919年の5月4日をきっかけとしてであった<sup>50</sup>。32名の逮捕学生の釈放をかちとった後、蔡元培は、これ以上弾圧が広がるのを避けるため、辞意を表明して、5月9日朝、北京を離れた。しかし、パリ講和会議における条約調印拒否の要求とともに、彼の留任運動が全国的に盛り上り、



ついに6月5日の上海の罷市・罷工に及ぶに至り、北洋軍閥政府もやむなく蔡元培の追放を断念せざるをえなかった。

こうした権力のなりふりかまわぬ干渉に直面する中で、彼は、一人の校長の進退に左右されず、その独立性を保持できる大学を確立する必要性を痛感した。換言すると、思想の自由の原則を実質化する大学の自治を、早急に制度的に確立する必要に迫られたのである。蔡元培は彼の帰任を歓迎する学生たちの前で、「どんな人が校長に任じても勝手にやることのできない」大学、たとえ、「毎年校長が交代するだけでなく、一年に何人校長が交代しても」、学問研究の目的に決して妨げのない大学が、当面の急務であることを明らかにした<sup>68</sup>。北大校長就任以来、評議会・教授会を組織し、大学行政に対する教員の権限の拡大を怠ることのなかった彼は、それを大至急、完全な「教授治校」<sup>69</sup>にまで育て上げねばならなかったのである。

そして、大学の自治という制度的保証なくして、その自由主義的大学運営がいかに脆いものであるかを痛切に思い知らされた蔡元培は、今回の事件を契機に、「各派の政党、或いは各派の教会の影響」から、教育の独立を保証する制度について、真剣に考察を開始した。その成果とも言うべきが、1922年3月の『教育独立議』であった。彼はそこで、フランスの学制に範をとった、大学区制を提唱している。それは、全国を数個の大学区に分け、そこに一つずつ大学を置き、それがその大学区内の一切の教育に関わる事業に当る、そして、各大学内の事務は、教授により組織された教育委員会が処理し、各大学区間の事務は、そこから選ばれた各大学の校長による、高等教育会議が担当する、また、教育総長は、その会議の承認を必要とし、内閣の更迭の影響を受けない、さらに、教育部は高等教育会議の決定した事務のうち、中央政府に関連するもののみを取扱うとともに、全国的な教育統計や報告に携わり、各大学区の事務には容喙できない、とほぼ以上の如き内容である。

1923年1月、彼は、財政総長羅文幹の再逮捕に関する、教育総長彭文霽の司法権の独立を犯し人権を蹂躪する策動に抗議し、辞表を提出して三たびヨーロッパ留学に出発した。そして、1926年、またもや呼び戻された時、彼が提出したのがこの教育独立の計画であった。翌27年、南京国民政府に参加した蔡元培は、長い間北洋軍閥政府の下にあって腐敗しきった教育部を、大学院と改称して人心を一新させ、自ら大学院長に就任した。そして彼は、教育行政に学術的精神を吹きこみ、「学術化を以て官僚化に代える」一大事業に乗出し、理想のプランである大学区制の試行に着手した<sup>70</sup>。

しかし、それを現実化する前提条件の未成熟と、旧勢力の執拗な抵抗とに阻まれ、早くも1928年8月、大学院は教育部に逆戻りし、蔡元培も辞職した。そして翌29年7月、大学区制の試行は正式に中止を宣告され、彼の理想は無惨にも潰え去った。ただ、それと同時に彼が提起した、「科学的研究の實行と科学的方法の普及」とをめぐず、「全国の学術の中堅」としての中央研究院<sup>71</sup>のみは生残り、その院長として、蔡元培自ら民族学の研究に当たっている。

さて、大学の自治の制度的確立により、自由な学問研究共同体としての実質を保証された、蔡元培の理想の大学は、社会といかなる関係にあり、そしてそこではいかなる性質の学問が行なわれるのか、我々はそれを次章で探ることにしよう。

## 五 北京大学の改革 一大学の使命一

我々はまず蔡元培の学生運動に関する発言の検討から始めることにしよう。

蔡元培は、1918年5月中日共同防敵軍事協定反対運動の中で結成された、学生救国会の機関誌『国民雑誌』（19年1月創刊）に序文を寄せた。彼はその中で、「学生の唯一の義務は求学にある。どうしてその求学の時間と精神的エネルギーとを犠牲にして、一般国民の業務に従い、この雑誌を営むのか。それは、愛国心に迫られ、やむをえないからである。もし学生以外の国民が、均しく国を愛し、救国の事業に尽力して、学生を求学に専心させ、学が成って後に大いに国に貢献させることができるならば、誠に学生の幸せである」と述べている。このことは、国民が救国にまだ立上がっていない段階において、学生の政治活動を例外的に認めたものと見てよからう。

ところで、18年の総統府への請願デモは何とか阻止できた蔡元培も<sup>補注②</sup>、19年5月4日、北大からデモが出発するのは、ついに止めることができなかった。彼は5月10日付の『出京後途中、北大学生に致すの函』の中で、今回の学生の行動が、「純粹に愛国の熱誠に出た」ものであることへの確信を披瀝し、「僕もまた国民の一人である。どうして諸君に不満の意があらうか」と述べた。彼のこの五四の学生の愛国運動についての共感と高い評価とは、1926年の三・一八の場合とともに、終生変ることはなかった<sup>69</sup>。

とはいうものの彼は、「私から見れば、学生は政治運動に対しては、ただ国民の注意をよびますだけである。彼らの運動が収めることのできる効果は、このようなものにすぎず、これ以上ふやすことはできない。彼らの責任はもう尽くされた」と宣告する<sup>70</sup>。従って彼は、五四の成功にのぼせ上がり、目先の際限のない政治問題に振りまわされて学生政客になり下がることのないよう<sup>71</sup>、また徒らに校務の些細なことにめくじらを立て、「自殺的罷課」<sup>ストライキ</sup>を頻発することのないよう<sup>72</sup>、繰返し厳しい警告を発するのである。

ということは、『私の北京大学における経歴』の中でも、「学生は学校の中では求学を最大の目的とすべきで、何らの政治的組織をもつべきではない。年齢が20才以上で、政治に対し特別の興味がある者は、個人の資格で政治団体に参加したらよいので、学校に関連を及ぼす必要はない」と言う如く、学生の政治運動は原則的に認めないとの態度を終始堅持していたことを示している。そして、たとえ例外的に認めることがあったとしても、それはあくまで「国家民族の存亡に関わる」<sup>73</sup> 非常の際に、国民に警鐘を乱打することに限られていたとしてよからう。

さてそれでは、「学生の唯一の義務」<sup>74</sup> であり、それを犠牲にすることは、「殆ど国土を喪失すると相等しい」<sup>75</sup> と極言される「神聖な学術」<sup>76</sup> とは、一体いかなる性質の学問であるか。彼は、「青年の学業は、将来の事業の準備である」とし、「一個人が廃物になるのはなお小さいことであるが、全民族の事業を誤るとすれば、関わりは何と重大なことか」と言う。彼にとり、国際情勢が今よりなお一層緊迫した時に、青年が古い世代の人々と同様に無能で、「中華民族が本当に万劫復せざる地位に陥る」ことほど、恐ろしいことはなかった<sup>77</sup>。従って、蔡元培の言う学問とは、「現在一切の政治的社会的な大問題」に「解決」の道を指し示すことのできる学問であり<sup>78</sup>、民族の滅亡の危機に迫いつめられている当時の中国にあっては、それはまさしく救国の課題に応えることのできる学問に他ならなかった。

ところで彼の重視する学問が、以上の如く民族的性質をもつものだとしたら、それは真理の探究ということと、一体いかなる関係にあるのだろうか。彼は、「およそ学理の研究の結果は、必ず人生に影響しなければならない。もし博く人類を愛する心性、社会に服務する習慣を養成することがなければ、証明の材料が不完全であるばかりか、研究の結果もまた虚しい」と述べている<sup>63</sup>。ということは、彼の場合、真理の探究はそれで終るのではなく、その結果が人生に影響を与えてこそ、初めて意味をもつものであった。

勿論、それはあくまで結果だとされている。しかし目的と結果とは、截然と分離できるものではなく、相互に円環をなすのが通常である。そして彼が言う人生とは、救国を喫緊の課題とする、この中国における人生以外の何物でもありえなかった。それは、いつでもどこでも通用する、抽象的な人生ではない。従って、真理の探究と救国の課題に応えるということとは、相互に他を排除するものではなく、互いに因となり果となり、密接不可分の関連をもつものであったとしてよい。ということは、救国の課題に応える学問は、真理の探究を土台とすることなしには不可能であり、また、真理の探究こそ、真に救国の課題に応えることのできる学問だということに他ならない。

だからして蔡元培は、「原有の基本科学を誤認して、救国の要因ではない」<sup>64</sup>とする如き、近視眼的性急さ、卑俗で浅薄な実用主義を厳しく戒めたのである。彼にとり、基礎的理論を軽視して進められる救国のための学問とは、畢竟、砂上の楼閣にすぎなかった。

そして蔡元培の言う、救国の課題に応える民族的性質の学問は、一国のみに通用する、狭い学問ではなかった。それは、その核心である真理の探究を媒介にして、「世界の学術の林に参加する」<sup>65</sup>、世界的な性質をも合わせもつものであった。

ところでそれは、「狭義の功利観念」を排除し、「真理のために真理を求める」ことを標榜する胡適の学問観とは<sup>66</sup>、一体どこが異なっているのか。我々はそれを、両者の『紅樓夢』研究のテーマに関する見解を手がかりに、見ておくことにしたい。『紅樓夢考証』の著者胡適は、その研究の主題を、作者の氏名・事蹟・著作の年代・版本の来歴といったことに限定する。それに対し、『石頭記索隱』の著者蔡元培は、文学書に対する最大の関心は作品そのものにあるとし、「著作の内容、すなわち胡適先生の言うところの『情節』は、決して考証の価値がないということはない」として、胡適の意見に反駁した<sup>67</sup>。要するに、文学作品の外面的事実のみを考証の対象とし、それで能事畢れりとするのが、胡適の「科学的」<sup>68</sup>研究の実態に他ならなかった。

胡適にとり、「『国故学』の性質は国故を理解することに他ならず、これは人類の求知の天性の要求するところ」であり、「時勢の需めに応じて」発展させる必要は毛頭なかった<sup>69</sup>。以上よりして、彼の言う学問は、純粹に知的興味を満足させること以外に、一切の目的も結果ももたない、いわばディレッタントイズムに他ならないと言ってよからう。そしてまた、それはいつでもどこでも通用する、いわば無色透明な真理を求める学問だったとしてよからう。換言すると、時代も国籍も不明な、コスモポリタンな性質の学問だったとしても言い過ぎではあるまい。

それに対し、蔡元培は『紅樓夢』を、「清康熙朝の政治小説」と把え、そこに脈うつ民族主義精神を指摘した。それは論証の過程にやや強引な点が見受けられるとはいえ、当時の時代思潮の結晶として『紅樓夢』を理解しようとする点で、作品の真実に内から迫るものであった。そして、こうした研究方法・着眼は、彼自身のおかれた時代的環境をぬきにしてはあ

りえず、いわば、彼の救国を熱望する強烈な民族主義精神が、作品の中に流れる民族主義精神の共鳴盤として作用したとも言えるだろう。その意味で、その『紅樓夢』研究は、明らかに彼の生きた時代の刻印をおされていたと同時に、過去と同様な観点からの研究の伝統を甦らせたものと見てよい。そして彼にとり、これこそ救国の課題に応えると同時に、真理の探究の学問であった。ということは、彼にとり、真理は具体的な時代の刻印を打たれたものであり、胡適のその如き、時・処の規定から全く自由な、無色透明なものではありえなかったことを示している。彼の場合、真理は常に具体的なものだからこそ、それは普遍性を獲得できるのである。そして抽象的な真理は、それが無色透明であるがゆえに、時に応じてさまざまな彩色がその上に可能であり、普遍性から疎外されることになるのである。従って蔡元培の場合、その学問の民族的性質と世界的性質とは、真理の独自の性格により、高次の立場で統一されていたと言ってよからう。以上が、蔡元培と胡適との両者の意図する学問の性質の決定的な相異点である。

ところで、胡適の誘掖の下に歴史学に進んだ顧頡剛の例が如実に示すように<sup>98</sup>、当初は救国の志を抱いていても、学問研究の内的論理の必然として、ともすれば閉鎖的高踏の生活に誘惑され、初志が鈍磨して行く可能性は十分に予想されることであった。だとすれば蔡元培は、大学を特権的知識人の地上の楽園、社会から孤絶した象牙の塔にしないために、いかなる手だてを用意していたのか。彼は前頁2行目の引用文の後に続けて、「だから本校は消費公社、平民講演、校役夜班と新潮雑誌などを提唱するのだ」と述べている。つまりこれらの活動は、「学理の研究」に検証の材料を提供するものであると同時に、その結果を無意味なものに終らせないための具体的保証であった。

そして蔡元培は、その中でもとりわけ重要でしかも大学人に最も適した活動として、成人教育、補習教育の実践を指摘している。民国元年、社会教育司を初めて設置した彼としては、それは至極当然の成りゆきであったと言える。彼は1916年12月、北京の通俗教育研究会において、「私はドイツに居た時、かの国の大学生が、いつも校外でその得意とするところを發揮して、一般の労働者に実用知識あるいは外国語を教授しているのを常に見た。フランスには大学教員の組織した、いわゆる平民大学があり、専ら夜間に講演していて、どんな人でも均しく入学して聴講でき、貧富・年令の故を以て、少しの差別もない」と述べた。当時、中国では清華学校のみが、こうした事業に従事していたにすぎなかった<sup>99</sup>。

そして、北大でこうした試みが緒についたのは、1918年の校役夜班、すなわち大学に働く門番や使丁たちの夜学の開校であった。これは、学生たちが就学の余暇に教科を担当するものであった。そして、それが更に飛躍的に前進したのは、五四運動をきっかけとしてであった。

蔡元培は、学生が五四運動の後、「政治問題の背後に、なお一層重要な社会問題があることを知った」とし、彼らが社会服務に力を尽し、平民教育、平民講演が日一日と発展しつつある状況を喜んでいる<sup>100</sup>。彼はこれを、「環境が適宜であることにより、教育を受ける機会をもった」<sup>101</sup> 学生たちに、人々の模範となるべき責務を自覚させ、それにより更に勉学に自己を鞭撻させる、「学業の保証」<sup>102</sup> であると力説した。と同時に、これこそ学生としてなすべき、「中国を救う一種の肝要な方法」<sup>103</sup> に他ならないと言っている。彼は、学生が研究の余暇を失学の人々の教育に費すことを奨励し、それは多少の時間を犠牲にしてもやるに値することであり、しかも不断にやり続けるよう希望している<sup>104</sup>。

それゆえ平民教育は、自らの真理の探究の結果を救国の課題に奉仕させる、極めて有効な保証であるに止まらず、「興奮剤」にも比すべき一過性の学生の政治運動に代る、救国のための極めて重要な日常的活動形態としても高く評価されたのである<sup>96</sup>。

かくして蔡元培にとり、大学の使命は、そこで行なわれる学問が救国の課題に応えることによって、民族、ひいては世界の利益に奉仕することで尽きるものではなかった。それは、大学にいる者が平民教育やそのほか「被災区の調査」<sup>97</sup>などの地道な社会サービスの日常的活動により、直接に救国に寄与することにおいてもまた果されるべきものであった。そして彼の場合、後者が、学生にふさわしい救国の活動として、それ自体独自の意義を担いつつ、しかも前者の使命が十全に達成されるための具体的保証ともなっているところに、その最大の特徴があった。

従ってそれは、各々、「性の近きところ、力のよく勉めるところ」に従い、自らを「眼光あり能力ありの人才」につくり上げることが、「真正の救国の準備」だとする、胡適の知識人の自己形成の方法とは<sup>98</sup>、根本的に異なっていた。胡適の場合、「国家の紛擾、外間の刺激」に背を向け、ひたすら書齋に閉じこもる、個人主義的、観念的ないわゆる読書救国論であった。それゆえそこに形成される知識人は、彼の依拠するイプセンの「真正な個人主義」の例が端的に物語る如く、民衆の立場と全く隔絶した、知的貴族以外の何物でもないだろう。それに対し、あくまで具体的に民衆の中に入り、日常的に救国の一端を担いつつ、それをまた自らの真理探究の責務の自覚の糧とする、この蔡元培の方法の中に、我々は現代中国の知識人の理想である、「又紅又專」の萌芽を読取れないだろうかと思う。

## 六 お わ り に

辛亥革命以後の、中国の歴史の複雑な歩みの中にあって、蔡元培の高等教育改革を阻む壁は余りにも厚かった。封建地主勢力の根強い残存、北大の校舎が逮捕学生の臨時監獄に使われる如き、軍閥政府のむき出しの弾圧、給料の遅配・欠配や経費不足といった経済的圧迫の中で、それは初めから蹉跎の運命にあったとも言えるかもしれない。しかし、そうした苛酷な条件にもめげず、敢然と推し進めた、彼の大学論の放つ理想の輝きは、決して色褪せるものではなからう。

そして、官僚や高級技術者養成の機関として発足した、同じくアジアの国である日本の大学が、百年たった今なお、立身出世主義的刻印を完全には払拭しきれていないのに対比する時、蔡元培が北大を「做官発財」の荒廃の中から救い上げ、自由な学問研究共同体の理念の下に再出発させたことのもつ意義は、いくら評価してもしすぎることはあるまい。

また知識人の自己形成においても、彼の提示した方法が、学問研究の根柢に社会的関心を持続させ、知識人を統一戦線に結集させて、中国革命を成功に導く上で果した役割も、これまた看過すべきではなからう。勿論、それが個々の知識人の内面にどのように媒介されたかについては、中国における学問研究のあり方、知識人のあり方について究める上で、更に具体的に検討する必要がある。

そしてまた、彼の大学論の根柢にあり、世界観教育・美感教育という彼独自の教育理想を成立たしめている、蔡元培の哲学思想についても、これまた今後の課題として残されている。

ともあれ、解放後30年を真近かにひかえ、文化大革命以来の教育政策が再検討の俎上への

ぼっている今日、「政治挂帥」が知育偏重に短絡的に回帰するのを避けるためにも、蔡元培の大学論は貴重な示唆に富むのではないかと思う。

ところで本稿を閉じるに当り、彼の大学論の中で、もう一つ重要なことが実は残されていることを告げておきたい。それは、1918年秋に「劳工神聖」<sup>10)</sup>を叫んで以後の、彼の生産労働と教育との結合に関する思想と<sup>11)</sup>、労働大学の設置として具体化されたその実践とを<sup>12)</sup>、いかに評価するかという問題である。大学院長時代、彼は南京郊外の陶行知の曉荘師範学校を一度ならず訪問したと伝えられているが<sup>13)</sup>、そうしたことも合わせ考えると、それを現代中国の「半労半学」の教育理想に連なるものと見ることもできるかもしれない。しかし、またそれは「半労半学」の評価に連動するとともに、国民党右派と目される彼の政治的活動ともからむがゆえに、生易しい問題ではない。1904年の『新年の夢』<sup>14)</sup>のユートピアの評価とも合わせて、別の稿に譲りたいと思う。(完)

## 注

- (1) 蔡尚思『蔡元培學術思想伝記』(1950年)
- (2) 黄世暉『蔡子民先生伝略』(蔡元培先生全集 台湾商務印書館 1968年)
- (3) 『我在教育界的經驗』(1937~38年)
- (4) 『在上海愛国女学校之演説』(1916年)の中で、中国教育会が、「革命精神のあるところ、男にも女にも均しく提唱すべきであり、教育はその根本である」との意見をもっていたとしている。
- (5) 『在上海愛国女学校之演説』
- (6) 北京大学校長に就任した時は、中国国民党は未だ成立していなかったが、165頁で述べるように、就任を勧めた人の中に孫文がいたことから見て、精神的には孫文と一致していたとしてよからう。
- (7) 高平叔『蔡子民先生伝略(下)』
- (8) 『對於教育方針之意見』(1912年)
- (9) 王蓮常『嚴幾道年譜』(1935年)
- (10) 『我在教育界的經驗』
- (11) 『致汪精衛函』(1917年)の中で、彼は、プロシヤがナポレオンに蹂躪された時、フィヒテが愛国主義の演説をして、大学教育を改善したがゆえに、すぐれた小学校教員が輩出し、プロシヤは亡国を免かれ、ドイツ統一の盛業を成しとげたと言う。
- (12) 『我在北京大学的經歷』(1934年)の中で、彼は、「私は本校と他校との界限を設けず、常に全般的な計画を立てて、その合理化を求めた」と言っている。北京大学の工科を北洋大学(天津)に併合し、北洋大学の法科を北京大学に併合したのは、その一例である。
- (13) 『対教育宗旨案之説明』
- (14) 陶英惠『蔡元培年譜(上)』に引く、『民立報』民国元年7月19日付「臨時教育会記事」による。
- (15) 同上7月27日付の蔡元培の『答客問』による。因みに、蔡元培の完全な全集は、まだ出されていない。
- (16) 陶英惠『蔡元培年譜(上)』373~374頁参照。
- (17) 『我在北京大学的經歷』
- (18) 『致汪精衛函』
- (19) 『就任北京大学校長之演説詞』
- (20) 『北京大学民国七年開学式之演説詞』(1918年)
- (21) 『読周春嶽君「大学改制之商榷」』(1917年)

- 22 『大学改制之事实及理由』 (1917年)
- 23 注21)に同じ。
- 24 同上。
- 25 注22)に同じ。
- 26 同上。
- 27 『北京大学在専門以上各学校校長會議提出討論之問題』 (1917年)
- 28 『我在北京大学的経歴』
- 29 『北京大学月刊発刊詞』 (1918年)
- 30 『北京大学二十二週年開学式之演説詞』 (1920年)
- 31 注28)に同じ。
- 32 注30)に同じ。
- 33 『就任北京大学校長之演説詞』
- 34 『北京大学二十二週年開学式之演説詞』。なお文中の古人とは、董仲舒を指す。
- 35 同上。
- 36 『論大学応設各科研究所之理由』 (1933年)
- 37 その他、『北京大学研究所之内容』(東方雑誌15卷3号 1918年)参照。
- 38 湖南自修大学については、1921年8月の毛沢東の創立宣言(北望社版毛沢東集第一巻)がある。蔡元培の『湖南自修大学的紹介与説明』は、「新教育」第5巻第1期第2期合刊号(1922年8月)に掲載されているとのことである。資料の入手については、専修大学の斎藤秋男教授の御好意を頂いた。
- 39 『北京大学月刊発刊詞』。なお文中の「囊括大典，網羅衆家」は、後漢書鄭玄伝の論に基づく。ただ原文は、易坤卦に基づき「括囊」となっている。
- 40 同上。
- 41 『我在北京大学的経歴』。なお文中の「其言之成理，持之有故」は、荀子非十二子篇に基づき、順序を逆転させたものである。
- 42 これは、「不謹細行，常作狭斜之游」の陳独秀を指す。彼は北洋軍閥政府の御用新聞に、「某日因争風抓傷某妓下部」と書きたてられ、1919年春、北大辞職に追いこまれた。これがいわゆる北大事件である。周作人『知堂回想録』356頁について見られたい。
- 43 『北京大学廿週年紀念特刊』の中の章士釗教授の演説詞参照。
- 44 『答林琴南函』 (1919年)
- 45 拙稿『初期李大釗の思想』(日本中国学会報 第二十六集)参照。
- 46 蔡尚思『蔡元培学術思想伝記』本文8頁。
- 47 山根幸夫『五四運動と蔡元培』(『論集近代中国と日本』所収 山川出版社 1976年)、及びその註に掲げられた文献を参照されたい。
- 48 『回任北京大学校長在全体学生歡迎会上之演説』 (1919年)
- 49 『我在北京大学的経歴』
- 50 『大学院公報刊辞』 (1928年)
- 51 同上。
- 52 『説青年運動』
- 53 『去年五月四日以来的回顧与今後的希望』 (1920年)
- 54 『告北京大学学生与全国学生聯合会書』 (1919年)
- 55 注25)に同じ。
- 56 注52)に同じ。
- 57 『国民雜誌序』 (1919年)

- 58 『犠牲学業損失与失土相等』（1931年）  
 59 注54に同じ。  
 60 注52に同じ。  
 61 注53に同じ。  
 62 『北京大学二十二週年開学式之演説詞』  
 63 『犠牲学業損失与失土相等』  
 64 『告北京大学学生与全国学生聯合会書』  
 65 胡適『論国故学』（1919年）  
 66 『石頭記索隱第六版自序』。なお『紅樓夢』の別名が『石頭記』である。  
 67 注65に同じ。  
 68 同上。  
 69 顧頡剛『ある歴史家の生い立ち』（平岡武夫訳 岩波書店）、『私から見た胡適』（『人間革命』所収 中国研究所 1950年）参照。  
 70 『在清華学校高等科演説詞』（1917年）  
 71 『去年五月四日以来的回顧与今後的希望』  
 72 『告北京大学学生与全国学生聯合会書』  
 73 『説青年運動』  
 74 注71に同じ。  
 75 『与北京大学学生話別』  
 76 同上。  
 77 同上。  
 78 胡適『愛国運動与求学』（1925年）  
 79 『劳工神聖』（1918年）  
 80 『工学互助団の大希望』、『我的新生活觀』、『国外勤工儉学会与国内工学互助団』など参照のこと。  
 81 『労働大学的意義及劳大学生的責任』（1930年）  
 82 白韜『回憶陶行知先生——其生平及其学説——』（龍溪書舎版 1971年）19頁参照。

補注(1) 『洪水与猛獸』（1920年）参照。また1932年、宋慶齡、楊銓、魯迅らとともに中国民権保障同盟を結成して、蔣介石国民政府の人権蹂躪、独裁体制強化に反対して活動したのも、その表現とみてよい。

補注(2) 蔡元培は『我在北京大学的經歷』の中で、「当北大学生出發時、我曾力阻他們、他們一定要参与、我因此引咎辭職、經慰留而罷」と述べている。しかし、張国燾『我的回憶』(一)によると、「五月廿一日、北京各大学一千多学生与少数天津学生代表結隊向総統府請願、反对這一協約的簽訂」とあり、また『時報』民国7年5月23日の国内專電の記事、及び「帰国留学生ノ軍事協約反对運動ニ付報告ノ件」第723号（『日本外交文書』大正7年第2冊上 365頁）にも、学生の総統府への請願デモが行なわれたことが記されている。蔡元培の記憶ちがいということが考えられない以上、北大の学生として集団的にデモに出発したのではなく、個々別々に「個人の資格で」参加したという形をとったものと見ることができる。

附記 本論文は昭和51年、52年の科学研究費の助成による成果の一部である。